公開セミナー

特集「希少野生動植物の保全」

堀田 昌伸

研究所では、これまでいくつかのプロジェクト研究等を通じて、県内の希少野生動植物の分布や生息・生育状況等の調査を行うとともに、それらの保護回復を図るための活動に直接にあるいは間接的に深く関わってきました。この間、県では県版レッドデータブック作成や希少野生動植物保護条例の制定、それにともなう保護回復事業計画の策定などを行っており、それらの施策にも研究結果が活かされてきました。今回は、これまでの公開セミナーではあまり取り上げなかった希少種について、堀田昌伸、樋口澄男、尾関雅章の3名がそれぞれ「南アルプス南部に生息するライチョウの現状」、「地域が支える野尻湖のホシツリモ復元活動」、「信州の希少野生植物にシカが迫る」というテーマで話題提供をしました。

まず最初はライチョウです。現在、ライチョウを取り巻く環境は厳しく、登山者等による攪乱やゴミの増加による環境悪化、それに伴うキツネやカラス等天敵の増加、シカによる高山植生の破壊、そして地球温暖化などいろいろな問題がおこっています。そのため、県では2008年度、ライチョウの保護回復事業計画を策定しています。ライチョウは、南北アルプス、乗鞍岳、御嶽山の高山帯に生息しています。日本のライチョウは世界の分布域の南限であり、今回とりあげた、南アルプス南部はさらにその最南端になります。この地域（イザルガ岳周辺から上河内岳）では、1996年より静岡ライチョウ研究会が標識調査などによりライチョウの生息状況を調査しています。研究所も必要に応じてその調査に参加し、昨年からは本格的に加わりました。調査の結果、最南端のイザルガ岳には毎年一つがいか二つがいが生息しており、それより北部の茶臼岳から上河内岳については、2007年の14つのなわばりが確認されました（図1）。ただ、ライチョウの場合、年による個体数の変化が激しいため、今後も調査を継続し、その動向を見極めていく必要があります。

つぎの話題は、野尻湖のホシツリモです。ホシツリモという耳慣れない水草ですが、湖の生態系ではなくてはならない生きものです。野尻湖はかつて水草が豊富な湖でした。しかし1970年代に水草が増え過ぎて漁業や船の航行の障害となったため、水草の除去を目的に水草を摂食するソウギョ5000匹を放流しました。すると水草は3年間で全滅し、希少な車軸藻類のホシツリモも姿を消してしまい、ついには国内の野生絶滅種となりました。水草が全く無い野尻湖では淡水赤潮が発生するなど生態系が不安定となったため、水草帯の復元が望まれました。そこで地元住民や研究者が参加して野尻湖水草復元研究会が発足し、ホシツリモをシンボルに水草帯を復元する活動を開始しました。この活動を通じてホシツリモの復元には、多くの水草や小動物、魚類などがバランス良く生息する野尻湖本来の生態系の復元が重要であることがわかってきました。また、ホシツリモ復元活動では、地域住民や小学校児童が大きな役割を担って、野尻湖での水草の調査・復元作業の他に、水環境・自然環境保全を啓発する環境教育活動が並行して進められており、地元の水草帯復元への理解が進んでいます（図2）。

最後は、希少野生植物へのシカの脅威についてです。ライチョウのところでも触れましたが、県では希少野生動植物保護条例にもとづき、希少野生動植物の保護回

図1 茶臼岳のライチョウの母親とヒナ（堀田撮影）

図2 地域住民によるヨシの生育場所（移行帯）の設置（樋口撮影）

復事業に取り組んでいます。植物ではこれまで、ヤシャイノデ（オシダ科）やタデスミレ（スミレ科）、ホテイアツモリ（ラン科）といった、長野県特産の希少種や個体数が非常に少なくなった種の保護回復事業を、多くの方々と連携して進めてきました。これらの種の生育状況を自生地で確認すると、いずれの種でも、ニホンジカによる採食の痕跡が認められ、種によっては採食による絶滅も危惧される状態にあることが明らかとなりました。そのため、こうした種については、植生保護柵の設置などのニホンジカ対策を、保護回復事業のなかで緊急に取り組むべき事項としています。希少植物にとって、ニホンジカによる採食は、植物体の損傷にとどまらず、その後の生長や繁殖へも影響をもたらします。長野県固有種であるタデスミレの生育状況の調査結果を中心に、こうした希少植物の生活におよぼすニホンジカの採食の影響について報告しました（図3）。

図3 タデスミレ（左）と食害をうけたタデスミレ（右）（尾関撮影）

当日の意見交換会やアンケートでは、さまざまな要望や意見が寄せられました。その中で、たとえば希少野生生物の全般や高山の動植物関係について、あるいは長野県の固有植物をとりあげてほしいなど、今後も希少種に関する話題提供を希望する回答が多く見られました。また、それら希少な生物をどのように保護・保全していくべきか、その調査や保全にどのように参加できるかそのようなしくみづくりを示してほしいなどの意見もありました。今回の発表は、このような要望や意見に少しはお応えできたのではないでしょうか。今後も希少種に関する研究所の取り組みについては、折に触れて取り上げていきたいと思います。

（ほった まさのぶ／自然環境部）